



平成27年12月8日(火)～平成28年2月28日(日)

第1回川裳会 昭和31年 株式会社川平屋提供

百年企業、それはその町の歴史を伝える証人です。そして、百年企業が多くあることは、その町が豊かである証ともいえます。

今回の企画展では、豊田市に約百年の長きにわたって続いた企業・商店の歴史について、古写真や大福帳などの貴重な資料とともに紹介します。創業時の時代背景、今まで引き継がれた社訓、百年の中でどのような困難があったのか、また、先人たちがいかにしてその危機を乗り越えてきたのか。

百年企業の歴史を振り返り、今を生きる力としていただければ幸いです。

※豊田市内すべての百年企業を紹介できたわけではありません。

今回、企画展開催にあたり、豊田市内に残る大正期以前創業の店舗を募集・調査しました。その結果は下の表のようになりました。

明治期に西加茂郡役所が置かれ、その後自動車産業の発展とともに豊田市の中心市街地となった挙母地区や、飯田街道、美濃街道、岡崎への七里街道が分岐する交通の要所で東加茂郡役所が置かれた足助町に数多く見られました。

その中から、14の企業について紹介します。 ※尚、本文中の敬称は省略させていただきました。

地区	企業・店舗名(創業年)
挙母地区	呉服さわこう(嘉永3年)、ウメムラ薬局(安政2年)、菓子又商店(江戸末期から明治初期)、十一屋雑貨店(明治元年)、山田屋(明治5年)、さかの葬祭(明治初期)、株式会社一心堂(明治15年)、株式会社川平屋(明治28年)、豊田プレステージホテル(明治中期)、丸定呉服店(明治期)、石川屋(明治中期)、吉田金物店(明治31年)、オケゲン(明治41年)、宝石メガネ時計すずき(明治44年)、上坂商店(明治45年)、若子写真館(大正2年)、野々山竹材店(大正初期)、高橋糰店(大正初期)、澤田米穀店(大正初期)、二村酒店(大正7年)、株式会社いろは牛肉店(大正9年)、三宅歯科医院(大正10年)、メガネ・時計の塚田(大正10年)、豊田酒造株式会社(大正12年)、川村屋(大正14年)
高岡地区	碧園 お茶の純平(明治3年)
猿投地区	浦野酒造(元治元年)、ヤマキ糰店(明治38年)
足助地区	広瀬重光刃物店(江戸末期)、玉田屋旅館(江戸末期)、井筒亀(明治20年)、村定酒店(明治中期)、スズマン本舗(明治35年)、いろは竹工所(明治末期)、株式会社川村屋(大正5年)
稲武地区	株式会社御菓子所まつ月(安政2年)
旭地区	中垣酒造(明治33年)



外山だい像 牧野敏太郎画
(呉服さわこう蔵)

文政11年(1828)、寺澤幸助は、^{はたごころ}機廻だった尾州旭村(現在の江南市)で生まれました。幸助の実家である寺澤家も機屋を営んでいました。嘉永3年(1850)、拳母村を訪れた幸助は、この地で八百屋を営んでいた「八百代」の外山だいと出会いました。互いに心が通い合うのを感じた二人は結婚して、現在地(豊田市桜町)の南隣に「澤幸呉服店」を構えました。「さわこう」の名前は、寺澤幸助の中の二文字をとってつけられました。

当初は、尾張で反物を仕入れ、猿投村、高橋村へ大八車に多くの反物をのせて、出向いて販売をしていました。予め決まった家を借り、事前に地域の方に声をかけてもらい、反物を陳列し、そこで注文を受けました。鉄道もなかった時代、店を開けてもお客さんが来てくれるわけでもないので、そのようにして注文を取り、大福帳に付けて、当時は掛け売りで販売を行っていました。

初代幸助とだいの後、二代目は外山作次郎と志き、三代目は外山源一と志げが継ぎました。四代目外山忠治・佐代子の代の昭和54年(1979)、竹生線拡幅に伴い現在地へ移転し、店名も「呉服さわこう」としました。現在は、五代目孝弘が四代目とともに店を盛り立てています。

「おだいさ」 「八百代」と「さわこう」を創業した外山だいの頑張りや、後世「おだいさ」の名前で親しまれました。今でも呉服さわこうを「おだいさ」と呼ぶ方もいるそうです。

初代伊藤^{きちさぶろう}吉三郎となつ 明治9年(1876)、伊藤^{ひら}なつは材木問屋「平定」伊藤定吉の三女として生まれました。平定は10代ほど続いた店で、後にホームセンターとなりました。明治28年(1891)、なつは現在の神明町で着物販売を始めました。そして、有松の絞り問屋「川村商店」より吉三郎を養子に迎え、新家を出してもらい、現在の本社所在地である豊田市桜町に「川吉商店」^{かわきち}を創業しました。これが川平屋の創業です

なつは着物の販売が好きで、「もうすぐ結婚する人がいる」という話を聞くと、翌日は朝の4時、5時から反物を背負って家を出て、どの店よりも早くそのお宅に向かい販売をしたそうです。主に古着を扱う呉服店が多かった当時でしたが、「川吉商店」では、なつの希望で新しい反物を主に扱いました。吉三郎はまめに帳簿をつけ、また、手先が器用だったので、広告の印刷の版木も自分で彫りました。

二代目から現在まで 大正14年(1925)、二代目俊郎は、川平屋呉服店と改名し、当時主産業だった製糸工場「^{かもさんし}加茂蚕糸」への販売で業績を伸ばしました。昭和30年代になり自動車産業が地域の基幹産業に成長すると、月賦販売をいち早く取り入れ、トヨタ自動車工業株式会社社宅へ行き、着物販売を行いました。

三代目康司は、昭和36年(1961)、株式会社川平屋に名称変更し、豊田市駅の商業施設「トヨビル」に婦人・紳士用品店を新設しました。四代目正人は、「和ギャラリー川平屋」を建てるなど呉服専門店への回帰をはかりました。また、時代のニーズに合わせてフォトスタジオ「桜工房」、「桜工房プレミアム」をオープンしました。

社是 「呉服を通じ、地域のお客様に和の文化を伝えていくこと。」



創業者 伊藤なつの肖像画
(株式会社川平屋蔵)

大変だったこと 第2次世界大戦の戦中・戦後、昭和17年から25年は「衣料品統制」、「生糸販売禁止令」が出され、必要なもののみ配給制となりました。どの店も大変な時代でした。川平屋呉服店では、衣料切符割当販売や、古着の着物・背広などの紳士服を販売することで乗り切りました。古着は、名古屋市堀田にあった名古屋古着市場(交換市)で競り落としたものを販売しました。当時、高校生だった現会長・康司は、満員電車の中、古着の入った大ぶろしきを背負って帰ったそうです。



碧園 お茶の純平と五代目山内祥正さん

大正9年に建てられた、かつて製茶を行っていた建物が現在店舗となっています。現在、店舗の通りを隔てた東側に製茶工場があります。

豊田市吉原町にある「碧園 お茶の純平」は、明治3年(1870)に初代山内金六がお茶の種(在来種)を貰い受け、碧海郡高岡村(現在の豊田市吉原町)で栽培を手がけたのが始まりです。二代目純平は、本格的に茶葉の製造・販売に乗り出しました。明治期の茶葉の加工は、煎茶(手揉み茶)・碾茶がありました。碾茶は抹茶の原料となるお茶で、収穫前に寒冷紗で覆いをかぶせた茶葉を蒸し、碾茶炉で乾燥して製造しました。純平は、もともと手先が器用で大工をしていたことから、碾茶用の製茶機械を考案し、大正9年(1920)年に「三河式碾茶機」と呼ばれる機械を開発しました。この機械は京都宇治でも賞賛を受け、碾茶製造の近代化に貢献しました。

三代目武義は茶の木の栽培に心血を注ぎ、四代目希男は全国に販路を広げました。現在は、希男の長男祥正が五代目を

継ぎ、お茶の品評会で「農林水産大臣賞」「内閣総理大臣賞」を受賞するなど、高品質なお茶を自ら栽培、製造しつつ、日本のお茶と文化を世界に広めるために躍進しています。

社訓 「良い品質の茶を安く提供。茶の文化を広める。」

明治38年(1905)、初代鈴木惣十は現在の豊田市平戸橋町にヤマキ糰子店を創業しました。農業を営むかたわら、農閑期の副業として、糰子づくりを始めたそうです。二代目鈴木喜三郎・かい夫妻の後、拳母藩の御典医石川家の娘でしっかり者のよしが三代目を継ぎました。四代目花子は糰子と味噌こうじのほかにも、時代にあわせて、もろみ・味噌の加工品も販売しました。五代目小夜子は、自宅で味噌を作ることが減ってきた現代、大豆を炊き、蒸すまでを店で行い、各家庭で熟成ができるように提案し、予約販売をしています。現在、六代目敦行・美加と共に糰子づくりの伝統を守っています。

家訓 「扱うお米を大切に。」



五代目鈴木小夜子さんと六代目鈴木敦行さん、美加さん夫妻

大変だったこと 平成5年(1993)の冷害の時は米が入手できず、米間屋はタイ米と抱き合わせでないと販売してくれませんでした。タイ米を使うと糰子の味は違ったものになりましたが、タイ米と日本米を合せた糰子を作り、事情を説明して販売し、乗り切りました。



五代目稲熊敏和さん(左)と正宏さん

砂糖・粉の卸売業と酒の小売の菓子又商店は、江戸末期から明治初期に稲熊又蔵が創業したと伝えられています。稲熊家は江戸期から現在の豊田市桜町に住み、商いをしていましたが、今の商売の形を築いたのは又蔵です。初代又蔵から二代目幸次郎の頃は、駄菓子の卸売を、大正期に入ると台湾から輸入される白砂糖を取り扱いました。昭和期に製粉業者から小麦粉などを仕入れて販売するようになりました。三代目弘一郎、四代目政美の時代を経て現在、五代目敏和が兄弟力を合わせて商いをしています。

大変だったこと 昭和48年(1973)のオイルショックです。砂糖がなくなり、物価高となりました。政府から上限小売価格のお達しが出ましたが、原価はどんどん上がり、利益がほとんどない状態になりました。オイルショックの後2年ほど原価高が続き、昭和51年、今度は砂糖の暴落が起きました。ひどい時は、朝・昼・夕で仕入れ値が違うこともありました。



足助川で山牛蒡を洗う様子 昭和20~30年代前半頃
スズマン本舗提供

衛兵を務めた後、家業を継ぎ、香嵐溪観光の中心地である巴橋の隣（現在のげたげん駐車場）に販売店を設けました。三代目万平のあと、現在は四代目智がスズマン本舗の伝統の味を守っています。現在も、漬物加工販売と共に、靴屋（もとは下駄屋）を営んでいます。漬物加工の最盛期は11月から12月で、この間に20トンもの山牛蒡を加工しています。

明治4年(1871)、現在の豊田市滝見町に生まれた鈴木萬五郎は、明治中期に現在地（現在の豊田市足助町石橋）で下駄屋を開きました。自宅の裏で、丸太を刻んで下駄を作り、現在の豊田市稲武地区や岐阜県恵那市、長野県下伊那郡根羽村まで、行商に行ったそうです。下駄のほかに常滑で仕入れた雛人形（土人形）も販売していました。一方、萬五郎の妻くには漬物が大好きで、漬物を漬けては、ご近所へ配っていました。萬五郎が行商先に配ったくにの漬けた漬物が評判となり、販売を始めたのが、明治35年(1902)のことでした。スズマン本舗の屋号は、初代鈴木萬五郎の名前に由来しています。

明治31年生まれの二代目銀平は、大正期に大正天皇の近

大変だったこと 山牛蒡とはゴボウではなくモリアザミの根の事です。初代の頃は、足助の山中で山牛蒡を栽培していましたが、山牛蒡は連作がきかないため、地元産のものが手に入りにくくなりました。二代目銀平は、山牛蒡の種を仕入れて農協に依頼して作ってもらったり、段戸山を開拓したりしてみましたが、気候が温暖になったせいかうまくいきませんでした。現在は、良い山牛蒡を求めて、栽培に適した北海道から仕入れています。近年の大変な出来事は、原料の値上がりです。高くても原料は良いものを仕入れて変わらない味を提供しています。



明治中期に建てられた長生軒

稲熊家は、墓石や過去帳によると、約400年前に現在の碧南市大浜から挙母へ来て、江戸期には挙母町東町の庄屋を務めた家柄でした。明治期に入ると、稲熊藤九郎は、材木屋や、人夫を使って大八車が通るほどの道を整備するなど、様々な事業を行うかたわら、2階建てのアパートを建てて間貸しを始めました。明治20年代後半から明治30年前半頃のことでした。二代目誠吉は、兵役後の明治44年(1911)から大正期にかけて庭を整備し、昭和初期に書院造のある建物と中庭を活かした料理屋を始めました。

昭和19年(1944)、料理屋をやめて軍需指定工場だったトヨタ自動車工業株式会社に厚生寮として

貸しました。昭和34年、二代目稲熊誠吉の妻はまと、嫁で三代目の則子は日本家屋を活かし「有限会社旅館長生軒」を起業しました。その後、都市化が進んだことからビジネスホテルへ変更することとなり、平成3年(1991)に「豊田プレステージホテル」が誕生しました。現在は四代目真佐子が、創業からの「おもてなしの心」を大切に、日々サービスの向上に努めています。

大変だったこと ホテル建設後のバブル崩壊と消費税の導入です。経営的に厳しい時期が続きましたが、経済界が持ち直すとともに、何とか危機を乗り越えました。



浦野酒造 タカギユミコ画

豊田市四郷町にある浦野合資会社は「浦野酒造」として知られ、銘酒「菊石」を醸造する老舗の酒造として知られています。醸造工場は籠川左岸の低位の河岸段丘上に立地しています。

浦野家は織田信長の家臣、八草城主 浦野源太郎将監の末裔で、江戸期には庄屋を務めた家柄でした。元治元年、浦野伴十郎は有り余る米をどうしようか考え、米の価値を上げるために酒造りを始めたと伝えられています。二代目は錠平、三代目は尾三自動車を創業した謙朗が継ぎました。

錠平、謙朗はともに猿投村長、県会議員、衆議院議員を務め、地域社会へも貢献しました。大正3年(1914)、謙朗

の代には合資会社に改組しています。猿投神社への信仰は厚く、昭和初期に神輿を寄付しています。この時に猿投神社から「菊石」の名をもらいました。それまでは「浦里」、「まんさく正宗」、「太閤」という名前の酒を製造していましたが、「菊石」に統合し、代表銘柄にしました。四代目鈇男、五代目は広島大学で醸造学を学んだ正二が婿養子となり、経営と酒造に携わりました。現在は、六代目純子が、「浦野酒造」を守っています。

社訓 「昔ながらの作り方、手作りで味わいのある酒を造ること。三河らしい味わいがあり、後口がきれいな飲み心地のお酒を造っています。」



挙母醸造での酒造り 昭和初期 豊田酒造株式会社提供
麴をほぐす作業をしているところです。

明治23年(1890)、挙母町で肥料商「花園屋」を起業した花園村(現在の豊田市花園町)出身の寺田栄次郎は、米穀商を営んだ後、大正12年(1923)、現在の豊田市喜多町に挙母醸造を創業しました。この地は、井戸を掘れば矢作川の伏流水が湧く、水に恵まれた場所でした。栄次郎は、挙母神社の許しを得て、句碑から「香櫻」の名前を貰いました。

二代目は、加藤家から養子に入った織太郎が、三代目は勝一が継ぎました。勝一は、昭和34年(1959)に挙母市が豊田市に市名変更すると、社名を豊田酒造株式会社に変更しました。現在は四代目壽孝が酒造を守っています。

社訓 「小さな酒造ですが、とにかく丁寧に造ることを心がけています。」



特約店看板 大正期 二村酒店蔵
櫨の1枚板を彫り彩色した看板です。

豊田市竹生町にある二村酒店は、大正7年(1918)、小原村大坂(現在の豊田市大坂町)の造り酒屋だった二村酒造本店の支店として開業しました。二村酒造本店は支店が瀬戸にもあり、瀬戸支店は二男が、挙母支店は三男だった二村静夫が創業しました。店舗内に掲げられている櫨の1枚板で作られた二村酒造本店銘酒「重盛」、銘酒「玉嵐」をはじめとする特約店の看板は、開業当時のものです。昭和37~8年二代目昌一の時代に店舗を改装、小原出身の三代目史朗の時代にも、拡幅工事のため、昭和56年(1981)に店舗改装、平成18年(2006)に現在の店舗となりました。

社訓 「顧客との信頼を大切に販売しています。」



お菓子所 まつ月と六代目松井秀夫さん

松井家はその昔、^{ぶせつまちむら}武節町村（現在の豊田市武節町）で漢方医を営んでいました。初代松井友吉は各地から、漢方薬の原料となるいろいろな根が集まってきた中で、特別粘るわらび根があるのに気づき、これを何らかの食べ物にできないものかと試行錯誤しました。そして誕生したのが、わらび餅でした。その後、武節町村の町の真ん中に大きな水車小屋を造り、そこでわらび粉を取りました。菓子屋として、わらび根から澱粉を取り、本わらび餅を創作したのは、松井友吉が日本で最初とされています。

初代から三代目まで松井友吉を襲名しました。四代目松井栄三郎は、学業に優れており、東京都知事だった後藤新平の書生となったため、妻くになが店を守りました。五代目幸三は「眠り柿づくし」を考案しました。5年（当初は7年）寝かした柿を使ったこの菓子は、宮内庁御用達となりました。六代目秀夫の時、店舗を現在の豊田市黒田町へ移転しました。現在、六代目秀夫は七代目多弘^{まさひろ}、八代目公宏^{きみひろ}とともに160年の伝統を守っています。

経営するうえで心がけていること

- 一、 先ず絶対借り入れ（借金）をしないこと、仕入れも現金であること。
- 二、 誰にもできることをやっても仕方がないので、生き残るため人にできないことをやる。
- 三、 すべてにありのまま、正直であること、特に原材料においては特別であること。



川村屋での結婚式の日写真 昭和期 株式会社川村屋提供

明治23年(1890)、東加茂郡酒吞町^{しやちのみ}（現在の豊田市幸海町）に生まれた近藤濱吉^{はまきち}は、愛知県瀬戸市にある川村屋（現在の川村屋賀栄）で修業し、のれん分けしてもらいました。濱吉は東京・横浜へ行き、横浜で出会った職人と技術交換をする形で、白餡の技術を習得しました。これが、後の「日月もなか」の元となりました。濱吉は水がおいしかったので、足助の地に店を開くことを決意しました。足助には、今も昔も豊富な湧水があり、この水が菓子作りに欠かせないといえます。

日月もなかの誕生 大正初期、中央線の開通により、それまで中馬街道を往来していた人たちは足助へ来な

くなったため、足助の人々は飯盛山（のちの香嵐溪^{こうらんけい}）に植樹をするなど、町おこしを実行しました。観光客が来るようになると、お土産が欲しいということで、濱吉はもなかを作りました。もなかの名前は、当時の東加茂郡郡長 鶴見専太郎、足助村長 深見林右衛門^{りん えもん}の協力を得て、元弘の乱（1331）において南朝・後醍醐天皇を守り、笠置山で奮戦した足助次郎重範公^{しげのり}の旗印を使うことが許され、「日月もなか」と名付けました。

二代目竣二の代を経て、現在は三代目信介が、伝統の味を守っています。

ガラスと大理石のショーケース 足助の川村屋と言えば、日月もなかと共に有名なのが、ガラスのショーケースです。大卒の初任給が73円だった昭和9年に、近藤濱吉が名古屋の職人に依頼して、763円かけて作らせました。輸入物の大理石を取り寄せて、特別注文でガラスも曲線に曲げる加工をしたそうです。

明治14年(1881)、現在の岡崎市に生まれた鈴木庄五郎は、大の弓道好きで、弓道の大会に参加するために各地へ出かけ、やがて、足助に住み始めたといひます。鈴木家には、庄五郎の弓道の腕前を伝える賞状が残されています。弓が賭博の対象にもなっていた明治期、庄五郎は弓で賞金を稼ぎましたが、妻が宿屋と飲食店の切り盛りをして家計を支えていたとの逸話も残っています。庄五郎の弓の腕前が転じて、矢作りを始めたのが先か、庄五郎が弓道で好成績を収めていたので、同じ矢を使えばよく当たるとのことで矢の注文が集まるようになったことがきっかけか定かではありませんが、宿屋と飲食店を営む家業とは別に、竹矢製作が始まりました。明治末頃のことです。



二代目受け継いだ末息子茂は、静岡県焼津市の矢師平井脩次のもとで修業し、師匠から御矢師「茂弘」の名前をもらい、昭和11年(1936)頃から矢師としての活動をはじめ、「いろは竹工所」を創業しました。庄五郎と茂は、自宅に矢場を作るほど弓道に打ち込みました。茂は日置流の目録を取得、全日本弓道連盟の教士の称号と六段位を授与された腕前で、足助中学校、足助高校で講師として指導も行いました。御矢師二代目「茂弘」の三代目武夫も、矢師平井脩二に師事し竹矢作りを修業しました。平成14年(2002)、武夫は旧足助町から無形文化財の指定を受けました。現在は四代目淳司が竹矢製作の技術を受け継いでいます。淳司は、「弓を引く人が(弓を)気持ちよく引けて、かつ早く上達すること」を心がけ、竹矢製作とともに、中学校・高等学校での弓具のメンテナンス活動に力を入れています。



野々山家は挙母町陣屋が桜町にあった頃から挙母に住み、鍋・鎌を修理する職人だったと伝えられています。竹屋を創業したのは、野々山吉四郎(きちしろう)です。吉四郎は竹やぶの持ち主に掛け合い値段を決め、竹を切って購入し、その竹を名古屋・半田・亀崎へ販売しました。当時、酒・味噌などは木の樽に漬けて製造しましたが、木の樽を締める籠(たが)は全て竹を使用しました。吉四郎の時代は、加工はせずに素材としての竹を販売しました。竹には虫が入る時期があり、竹屋だけでは食べていくことが出来ないため、初代吉四郎の時代は八百屋を兼業し、八百屋は妻が切り盛りしました。

二代目吉三郎の頃は竹の卸屋でしたが、竹屋一本で食べていけるようになり、八百屋は廃業しました。三代目日出光(ひでみつ)の時代になると、トヨタ自動車工業株式会社の操業により町が大きく豊かになったので竹はよく売れました。竹の卸と共に、竹の垣根の製作を主な仕事としました。現在は、四代目治が、注文を受けて庭の竹垣の施工を行っています。

若子写真館の初代鎌市(けんいち)は、酒屋をはじめ様々な職業を転々とした後、大正2年、挙母町竹生(たききょう) (現在の豊田市竹生町) に若子写真館を開館しました。鉄道開通以前、街道沿いにある竹生が挙母で一番の繁華街でした。当時は写真館が少なく、現在の豊田市南部は山崎写真館が、豊田市北部は若子写真館が撮影をしました。鎌市の時代は猿投町、藤岡町での仕事も自転車に機材を積んで、1泊での仕事だったそうです。峠を越えて小原(あきら)へ行ったときに、道に迷って狐に化かされたという話も伝わっています。

二代目旭は、豊田市文化財保護審議会を務め、地域の歴史を残す役割を写真が果たしていることを早くから意識し、郷土史研究者としても知られていました。

若子写真館は挙母駅開業式祝賀会ほか、挙母・竹生の記録写真など多数残しています。



開店広告 大正2年『挙母』より



二代目松村台太郎と一心堂 大正期 一心堂提供
現在、県内各地に一心堂の名前の付く店舗がありますが、拳母(豊田市)の一心堂で技術を習得してのれん分けした店です。

尾張藩から、拳母藩家老の家柄だった松村家の婿養子に入った初代吉太郎は、篆刻を彫ることができたことから、明治15年(1882)、一心堂を創業しました。明治期に入り武士たちはそれまでの禄(給料)を得られなくなり、生きていくために新しい仕事をする必要がありました。明治6年(1873)、明治新政府から「明治六年十月一日以降ノ證書ニハ必ず實印ヲ用ユ可シ」という太政官布告が出されたことから、印章はよく売れました。

吉太郎が若くして亡くなると、東栄町の武家佐々木家から婿養子もらい、台太郎が二代目となりました。三代目は二代目の遠縁にあたる佐々木利十が継ぎました。利十は太平洋戦時中、足を悪くして戦争に行けない人たちを募って、住み込みで三食を付けて、印を彫る技術を伝承しました。当時はゴム印も手彫りの時代でした。四代目努は昭和42年(1967)、一心堂宮口工場を建設して、ゴム印製作をはじめました。現在、五代目希が、六代目となる理と共に、一心堂の伝統を守っています。

社訓 「小さな店だけど、彫ることに誇りをもち、真心のサービスをする。」

進駐軍に印章を販売 進駐軍が日本へ来た頃、お土産に印鑑を買っていくアメリカ人が多かったそうです。佐々木利十は印鑑をドルではなく時計と交換する形で販売し、交換した時計を名古屋まで売りに行きお金に換えました。昭和初期まで借地だった一心堂の土地を買い取ったのもこの頃でした。



初代鈴木鑑造 大正期 宝石メガネ時計すずき提供
時計と共に蓄音機の看板も見られます。

電気もまだ通っていなかった明治44年(1911)、好奇心旺盛だった初代鈴木鑑造は神明町にあった自転車店に奉公した後独立して、時代の先端だった時計屋を創業しました。「拳母町ではじめての時計店だったと聞いています。」と四代目政勝はいいます。

農家の三男だった鑑造は、鈴木時計舗の開店資金を奉公時代に貯めて準備し、また、不足分は人から借りたそうです。昭和初期の鈴木時計舗では、ライター、蓄音機なども取り扱いました。その後、明治44年生まれの子二代目一一、三代目勝也の時代を経て、平成27年4月、四代目政勝が継ぎました。

社訓など 「いつまでも心にくるおつきあい」

分岐点 分岐点は、ジャスコ豊田店と、そごう豊田店の出店の際に、「支店を出しませんか」という話があった時です。大きくするだけが商売ではなく、地元に残り、地道にコツコツ地域に根ざした商いを続けることを選びました。

取材協力 呉服さわこう、菓子又商店、株式会社一心堂、株式会社川平屋、豊田プレステージホテル、宝石メガネ時計すずき、若子写真館、野々山竹材店、二村酒店、豊田酒造株式会社、碧園お茶の純平、浦野酒造、ヤマキ靴店、スズマン本舗、いろは竹工所、株式会社川村屋、株式会社御菓子所まつ月
参考文献 『法令全書(明治6年)』内閣官報局1889年、『豊田商工名鑑』豊田市役所1960年、『豊田商工名鑑』豊田市役所1968年、『豊田市史三巻』豊田市1978年、『愛知県の地名』平凡社1981年、『中部産業百年史』日本経済新聞社1981年、『豊田市史人物編』豊田市1987年、『豊田市企業ガイドブック』豊田市1994年、『拳母資料にみる明治大正昭和のあゆみ』豊田市教育委員会1995年、『愛知千年企業明治時代編』北見正明2013年、『平成25年度豊田市郷土資料館特別展 一弓入魂』豊田市郷土資料館2014年

平成27年度 豊田市近代の産業とくらし発見館企画展『とよたの百年企業』
発行日 平成27年12月8日発行 編集・発行 豊田市近代の産業とくらし発見館
〒471-0027 愛知県豊田市喜多町4丁目45番地 TEL 0565-33-0301 FAX 0565-33-0319